

小学校国語科における教育実践臨床研究

—— 授業デザインの可能性 ——

滝 浪 常 雄

A Clinical Study of The Educational Practices in Japanese Language
at Elementary School: The Possibilities of Lesson Design

Tsuneo TAKINAMI

はじめに

平成20年夏に学習指導要領が改訂され、現在その移行期に入っている。周知のように平成23年度から完全実施に向け、現場の教師たちは新しい授業の改革に着々と取り組み始めている。特に国語科においては、学習指導要領の背景にPISA型読解力の要請があり、これからの国語科の学習が指導方法、指導形態を含めて、新しい試みがなされていくだろうと思われる。

しかし、時代の趨勢に従い、新学習指導要領を基づいた授業が行われるのはやむを得ないとしても、教師の側にもう少し授業に対する意識の持ち方や授業そのものの本質を今一度問い直すことが必要ではないだろうか。単なる目標達成のためだけが授業の本質だろうか。

授業そのものの考えを真摯に捉え、教師自身が目の前の子どもと対峙し、授業を生み出すことが大切である。そのことを痛感したのは、静岡大学教育学部附属小学校（以下浜松附属小）の研究¹⁾において、講師として故藤岡完治氏（以下藤岡氏）²⁾にご指導いただいたことがきっかけである。特に国語科教育においては藤岡氏より「言葉がいかに子どもに獲得されていくか」と問いかかけられ、その深遠なる問いを持ち続けながら研究に取り組んでいる次第である。

本研究においては、藤岡氏の授業論をベースにして授業の本質を再認識し、特に小学校の国語科の授業を焦点化して、臨床的に研究していきたいと考えている。本稿では、特に教師の授業づくりへの臨床的なアプローチとして、授業デザインという考え方を考察し、国語科の授業構想（単元構想も含む）において、その可能性を明らかにしていきたい。なお、試案ではあるが、授業デザインのモデルも提案したい。

1) 静岡大学教育学部附属浜松小学校1994年～1999年「自分らしく生きる力の創造」として、「教科」、「統合」、「生活創造」について研究。

2) 藤岡完治：1994年より研究の指導講師としてかかわっていただいた。当時は横浜国立大学教授。のち京都大学教授となるも、1999年に逝去。

I. 授業設計と授業デザインという考え方

1. 授業は生きているということ

藤岡氏は、そもそも授業は生きて動いているものであると述べている。なぜなら授業を構成する子どもも教師も「一個の生命要素であり、授業の中で一人ひとりが個性的で、独自の存在として感じ、考え、意志し、かかわりあい、変化しながら授業の中で生きている。」からである。子どもも教師も授業の中で、互いに人、もの、ことの世界と関わりながら、自己を表現し合う場である。この表現こそが、「生きていること」の本質であるということなのである。³⁾

したがって、授業は一人ひとりの子どもが思い思いに考え、活動しながら自己を表現しているものである。しかし、それでいて授業全体は一定の方向に向かっていて、何かを全体としても表現しているという。これをコヒーレントな関係と藤岡氏は呼んでいる。⁴⁾ この関係によって授業が一定の方向に向かって生きて動いているというのであり、この「生き物」のような存在が授業なのである。

この「生き物」のような授業を、いかに教師自身が自分の実現したい授業として創り上げていくかが、授業デザインの考え方である。

2. 授業デザインとは

藤岡氏は「授業設計」と「授業デザイン」の違いを以下のように述べながら、授業デザインの重要性を唱えている。⁵⁾

「授業設計」が、授業の「動的生命性」をあいまいなものとし、計画的に意図的にコントロールしようとするのが授業設計であるのに対し、授業デザインは、複雑性、あいまい性を授業の本質とみならず。授業は人間的なものであり、多様な生活様式や経験を有する個人が共有する、力動的で変化に富んだ発展的な場なのである。そして、その性質が子どもと教師の「発見」や「創造」の源泉であるとするのである。

これまでの授業がどちらかというと、「授業設計」という形で進められてきたのではないかと、いうことが分かる。確かにこれまで計画的意図的に指導することが望まれてきた。そして、授業を創り上げていく上で、目標をどう捉えて、目標を達成することが、一時間一時間の授業のノルマであり、その積み重ねによって、単元の目標の達成がなされていくというものであった。このことを、浅田匡氏は授業設計とは「授業目標を立て、その目標の達成のために、教材（学習内容）学習活動、そして評価」といった一連の流れ（過程）を具体化したプランを作成することである。」

3) 浅田匡, 生田孝至, 藤岡完治『成長する教師』金子書房, 1998, p. 9.

4) 「清水博『生命を捉えなおす』中公新書, 1986.」より「生命の要素がそれぞれの主体性を維持した上で、相互に協力して互いに整合的な表現をとることできる関係。」を参照の上、藤岡氏は前掲書3) p9の中で実際の授業内に起きている現象として捉え、「上の授業場面において個々の子どもは思い思いに考え、作業し『自己』を表現している。にもかかわらず授業全体には一定の方向に向かっての流れがあり、全体としての何かを表現しつつづけている。このような構成要素のそれぞれの表現の間に本質的な差異があるにもかかわらず相互にかかわり、主体性を保持した上で全体として整合的な関係を生成している。」と記している。

5) 浅田匡, 生田孝至, 藤岡完治『成長する教師』金子書房, 1998, p. 10.

と指摘している通りである。⁶⁾つまり、授業を設定された目標を達成するための、もっと言えば効率的に達成するための計画ということが前提として考えられているということである。全てを否定するわけではないが、教師がただ単に目標達成のための授業で終始してしまっているのだろうか。浅田氏は、また、授業が「生きて動いている」ということが無視され、教師の制御された形で構想され、展開されていったとしたら、教師と子どもの関係が「教える－教えられる」の関係に固定化されてしまい、教師が教える喜びや誇りを感じるものがなくなってしまうのではないかと述べている。⁷⁾まさに授業が生きているからこそ、教える喜びや誇りがあり、子どもにも学ぶ喜びや楽しさが生まれるのである。これなくして授業は成立しない。

だからこそ、「授業設計」に陥るだけの授業づくりではなく、教師が子どもと共に学び育ち、なおかつ教師に喜びと誇りが生まれ、子どもに学びの楽しさや充足感がわき上がる授業を教師は構築していくことが大切なのである。そのための授業づくりとして、授業デザインという考え方が求められてくるのである。

II. 授業デザインによる授業構想の意義

具体的に授業デザインとはどういうものであるかということについて述べてみたい。前述したように授業デザインとは、簡単に言えば、授業をいかに生きて動くように構想するかということである。これは「授業設計」が授業をどう動かそうかと、外から授業を見ているのに対して、授業デザインでは、教師も授業の中で、どう子どもと、また学習対象と生きていくかを考えるものである。藤岡氏はこれを「内的行為モデル」をつくることであると述べている。⁸⁾

授業の中で、教師自身がどう生きていくか、どう変わっていくか、ある意味で劇のようにストーリーを考えることだとも述べ、「想像のなかで授業を生きてみる」⁹⁾ が必要だということである。

そこで、授業をデザインするための方法として、以下に掲げた6つの構成要素をもとにした構想方法が藤岡氏によって考案されたのである。¹⁰⁾

これは従来の授業が目標や教材観をもとに構想されていくのに対し、授業デザインは、いわゆる授業をひとつの劇と捉えたとしたら、そのシナリオを思い描くためのツールだとも言える。自分がどんな授業をしてみたいか、自分の思い描く様子は劇化と捉えてもいいのではないだろうか。

では、実際に授業の構想そのものは、一体どこから構想していだろうか。結論的には人それぞれによって違う。目標から考えていく場合もあるだろうし、教材の内容から考える場合もあるだろう。また、学習者の実態から考えることもあるだろうし、学習条件や環境からという場合もあるだろう。

6) 浅田匡「授業設計から授業のデザインへ」『月刊国語教育』No 28, 2008, pp. 30-33.

7) 前掲書6)に同じ。

8) 浅田匡, 生田孝至, 藤岡完治『成長する教師』金子書房, 1998, p. 14.

9) 前掲書8)に同じ。

10) この6つの構成要素による授業デザインは、藤岡氏を中心に、1989年から藤沢教育文センター研究部で研究された。1996年より静岡大学教育学部附属浜松小学校でも取り入れられた。当時は「統合」という現在の総合的な学習に当たる研究をしていて、その授業構想を表すために授業デザインが受け入れられた。そして、教科学習にも適用され、当校で藤岡氏に指導を受けながら、アレンジが加えられたが、基本的には当センターの考え方と変わらない。現在でも藤沢教育文化センター研究部ではこの授業デザインを使った実践が続けられている。

したがって、この授業デザインでは6つの構成要素を示すことによって、授業構想の視点を定めるだけであって、どれからでも出発してもいいのである。最終的に構想が固まってくればいいのである。

ただ、構想とは頭の中で、混沌とした状態を少しずつ整理していかなければならない。よって、6つの構成要素によって、構想の仕方がはっきりと提示されるということである。藤岡氏はこれら6つの構成要素を「一つ一つ明らかにしながら相互に関係づけ、相互の関連において修正し、ねがいを中心に全体として調和のとれた意図の明確な授業の世界を構想していく」のが授業構想のねらいである。¹¹⁾ とかく目標達成のためだけの「授業設計」になりがちであるが、教師が授業をするということは、授業の中で自分自身が学びつつ、行うことであり、そこに教師なりに練り上げた授業が構想されなければならない。また、藤岡氏は「教材と学習者と教師のそれぞれの願いや方向性が出会う『経験』のためのダイナミックな『しかけ』を意図的にもうけることである。」とも述べている。¹²⁾ 授業デザインによる構想によって、自分の実現したい授業が創造され、具現化へと導かれるのである。

Ⅲ. 授業デザインの6つの構成要素

それでは、もう少し6つの構成要素について詳しく見ていきたい。以下に示す授業デザインの6つの構成要素については、2009年3月に藤沢教育文化センターから発行された「教育実践臨床研究」¹³⁾ によるものである。これまでの研究の成果として、よくまとめられているので、示してみたい。

A ねがい

この授業（単元）を通して、子どもたちにどんなことを学んでほしいのか、どんな経験をしてほしいのか、どのように育ってほしいのか等、教科書や指導書にとらわれず、自分自身の授業の「ねがい」を自由に書き出してみる。

B 目標

この授業（単元）を通して、子どもたちはどんなことを具体的に学んだり、身に付けたりするのか、授業の目標を具体的に書き出してみる。記入にあたっては、指導要領や教育課程のどの部分に相当するか等も考えてみる。

C 学習者の実態

一般的な児童・生徒の実態ではなく、自分の目の前の子どもたちの状況を書き出してみる。授業に対する姿勢やレディネスは？「教材」に対する興味や関心は？

11) 藤岡完治『看護教育のための授業設計ワークブック』医学書院、1994、pp. 16.

12) 藤岡完治「第6章学ぶことと教えること」『学校教育とコンピュータ』藤沢教育文化センター、1992、pp. 155.

13) 目黒悟「第1章6つの構成要素による授業デザインの基本的な考え方」『教育実践臨床研究 授業研究と教師の成長を結ぶ』藤沢教育文化センター、2009、pp. 28-29.

D 教材の研究

この教材でどんなことが学べるか、こんな教材があるからこんな授業がしてみたい等、自分なりに教材解釈を書き出してみる。あるいは、こんな学習をするためにはどんな教材が有効か、どんな教材が準備できるか等を書き出してみる。

E 教授方略

教材を具体的にどのように扱うか、学習者の実態を踏まえた上でどのような方法や手だてを用意するか、また、どのような方法で具体的に授業を展開するか等、授業に臨むあたっての基本方針（この授業にはこんな方法で迫ってみよう等）を書き出してみる。

F 学習環境・条件

どのような人的・物的資源、学習メディア等が利用できそうか、あるいは、どのような学習の場を設定する必要があるか等を書き出してみる。

これらの6つの要素が関連しながら、授業が構想されるのである。作業に当たってはどの要素から考えてもいいが、この6つの要素の中では「ねがい」と「学習者の実態」が特に重要かつ中核になってくると思われる。なぜなら授業が生きて動いていることの根本は、教師と学習者の関係なくして成り立たないからである。その2者の関係性の中で、学習対象を挟んで、ダイナミックに授業が展開していくのである。つまり、「ねがい」と「学習者の実態」の今、ここでの在り様を把握し、授業を思い描くことが、授業デザインの基本的な考え方だと言えよう。そして、この2つの要素を中心に、他の要素の関係性が生まれていく。その場合には線で結びながら、その線に関係していることを記述していけばいい。そうすることで、自分が実現したい授業が混沌としたものから、徐々に形になっていくのである。

なお、授業デザイン自体は、単元構想の段階でも、一時間一時間の授業構想の段階でも活用することができるので、授業構想という場合、単元構想も含んでいる。また、基本的には、どの教科においても運用できる。

V. 授業デザインによる国語科の授業構想

1. 国語科の授業の基本的な考え方

ここまで、藤岡氏の考案された授業デザインの概要を述べてきたが、すでに藤沢教育文化センターの研究や浜松附属小の研究において、あらゆる教科において実践されてきている。筆者も国語科の授業構想に生かしてきた。そこで、これまでの実践を踏まえて藤岡氏のいう生きて動いている授業を国語科授業に当てはめて考察し、そのための国語科の授業デザインの構成要素を明らかにしたい。

国語科の授業は周知のように「話す」「聞く」「書く」「読む」の言語活動によって成り立っており、これらの言語能力を高めることが目標となっている。¹⁴⁾けれども、単に言語能力を高めるだけの授業として捉えていたら、これは藤岡氏のいう「授業設計」となってしまう。たとえば「話

す」能力を育てるために、これこれの教材があり、これを効率的に指導することで「話す」能力は育てられるという具合である。

しかし、「話す」という言語能力は、その能力によって、古来さまざまな言語文化を生み出してきたのである。古典芸能や大衆芸能の類から、現代の司会、アナウンス、MCなどの語り口など、これまでも、またこれ以降も生み出されてくるだろうと思う。また「書く」「読む」ことにおいても、数多くの文学作品やその他の文章が書かれ、読まれてきたのである。であれば、国語科の授業では、単に言語能力の育成のみではなく、言語文化を享受し、創造していくことが、本質的な授業の在り方ではないかと考える。

したがって、言語文化として国語科の教材を捉えていくことによって、子どもがその言語文化と関わり、そこから何を学んでいくのか。それは言語文化を生み出してきた先人の言語能力のすばらしさである。そして、学ぶことの経験によって、言語文化を享受するばかりでなく、自ら言語文化の担い手として、創造していく学びに変容していくことが大切にされてこなければならぬだろう。

また、吉田裕久氏がこれからの授業力の基盤となるべき、国語科としての今日的課題として「国語教育観」「国語学力観」「自前の年間指導計画作成」が求められるとしているが、前者2つの項目にもつながるのではないかと考える。¹⁵⁾まさに国語教育観や国語学力観を明確に持っていなければ、国語科の授業は成立し得ないのである。

そうなれば、国語科の授業においても「教える―教えられる」といった関係でなく、教師も子どもも言語文化から学ぶ場となり、ダイナミックな授業展開が望まれてくる。そして、言語文化への参加、つまりは創造へ向かっていくのである。こういった授業を構想するために、国語科の授業をデザインしていくことの意味があると考ええる。

2. 国語科の授業構想として考えた場合の授業デザインの6つの構成要素

では、授業デザインを国語科として、6つの構成要素をどう解釈して、適用していくかを考察してみたい。

(1) 「A ねがい」について

教師の教育観、人間観、文化観に支えられたものと言え、授業をデザインする上での中心となる。ここでは教材のもつ優れた価値を見出し、学習対象として学習者にはこんな価値にふれてほしい。こういう見方や考え方、感じ方が育ってほしいということが書かれることになる。いわば、教師が望むべき、学習者の学びの姿である。

したがって、国語科においては「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」等で扱われる言語文化の価値や、「読むこと」のテキストであれば、文学的価値を踏まえて、子どもに触れてほしい言語文化の奥深さや、言葉に対する見方や考え方、感じ方を考えていくことになる。単元レベルで考えた場合、この「ねがい」が一時間一時間の授業にも反映していくものと考ええる。

14) 戦後、日本の国語教育は言語の教育の立場で、一貫して展開されてきた。『小学校学習指導要領解説平成20年8月』においても一層の重視が掲げられている。

15) 吉田裕久『授業力』の基盤となる哲学と技能の再思』『教育科学 国語教育』, No687, 2007, pp. 11-13.

(2) 「B 目標」について

子どもが身に付けてほしい言語力が記されてくる。したがって、学習指導要領の目標や指導事項等と重ね合わせて吟味していき、この単元に合致した目標を考えていくことである。そして、学習者の実態と関連しながら、子ども一人ひとりの学びの内容をはっきりと描くことである。これによって、自分がどんな力を付けてほしいかが明確になり、評価の指標ともなるのである。この授業（単元）で何を身に付けてほしいか、具体的な内容を考えていくことが必要である。

たとえば低学年の「読むこと」の目標は「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。」とある。しかし、実際のテキストを読む時、このままの目標として捉えることはしないだろうということである。やはり、テキストの文章内容をどう読み取るか、教師の側で言えば、どう読み取らせたいか、ひいては、この教材を読む学習によって、どんな力を付けさせたいかを具体的に設定することが大切なのである。

(3) 「C 学習者の実態」について

ここは、今まさに教師自身が対峙している、目の前の学習者である子どもの実態をありのままに書くことである。一人一人の言語力を把握するとともに、この単元に対して、どれだけ興味関心がどのようにあるのかを考えていく。目の前の子どもは日々変化しているし、その日その日によって表す姿は違ってくるかもしれないが、子どものリアルな姿を記しておくことであるし、変化していれば修正していくことが必要ある。

特に国語科であれば、「話す」「聞く」「書く」「読む」といった言語能力を把握しておく必要がある。しかし、一歩踏み込んで、この教材を扱ったら、子どもはどんな反応をするだろうか、こんな学習活動になるのではないかと予想されることを記しておくことも必要だと考える。それは「ねがい」「目標」「教授方略」などの他の構成要素に関わってくるからである。

(4) 「D 教材の研究」について

「ねがい」のところで記したが言語文化としての価値や意味を考え、どのような学びの姿が生活、実社会に生きて働く力となっていくかを考えていくところである。

従来の作品研究や教材研究と捉えていいが、教師の解釈をより深めていきたいものである。この教材の、学習としての子どものどんな意味や価値があるのか、また、言語文化として、そもそもどういう意味や価値があるか、じっくり考えることである。これによって教師の教材研究に深みが増し、授業（単元）がダイナミックな展開を生んでいくことになるのである。

たとえば、筆者が実践した「自分の気に入ったものや場所をみんなに紹介しよう」¹⁶⁾では、自分は生活の中で気に入ったものをタウン誌の中に書かれている紹介記事のように表現する活動を行ったが、タウン誌の記事はまさに現代の言語文化の所産と言える。タウン誌の記事の存在価値や意味を探ることから、教材の研究は始まると言っていい。そして、子どもに与えることでどんな学びが期待されるのかを考えることで、「ねがい」とも深く関わってくるのである。

16) 拙稿「自分の気に入ったものや場所をみんなに紹介しよう」『静岡大学教育学部附属浜松小学校紀要』、1997、pp. 27-30.

(5) 「E 教授方略」について

ここでは一時間の授業レベルと単元レベルの扱いによって異なるが、学習の流れを書いていくことになる。単元レベルでは、指導計画的なことが書かれてくるが、まだ構想の段階であるので、教材をいかに扱うかを指導計画を立てながら、この段階は、次の学習環境・条件と考え合わせてここではこういう人材に来てもらおう、ここではこの場で学習しようということを書いていくことでいい。ここがはっきりしてくることは、授業なり単元なりの全体像が見えてくることにもなるのである。

(6) 「F 学習環境・条件」について

国語科の学習の場合、そのほとんどは教室で行われることが多いが、単元を構想する上では、あらゆる可能性を探っていくことである。

たとえば場合によっては教師以外の指導者として、外部の人材を呼ぶこともあるだろうし、逆に地域に出て行って、ある人材に出会うことも考えられる。また、資料や情報を単に図書館やコンピュータに頼るばかりでなく、フィールドワークすることも考えられるわけで、これは「ねがい」「教材の研究」「教授方略」など他の構成要素を考え合わせながら、いろいろなアイデアを考えていくといいと思う。

たとえば、前述の「自分の気に入ったものや場所をみんなに紹介しよう」では、市内にある店、公園、神社仏閣を訪れて、資料や情報を集めた。また、タウン誌で記事を書いている方に実際に書き方のコツを伝授してもらったこともあった。また筆者の「作家になって本を書こう」¹⁷⁾では実際に地域を中心に活躍されていた作家の方に来ていただき、物語の書き方を教えていただいたこともある。国語科の目標が言語力を身に付け、それが生きて働く力となり、日常の文化実践に参加するためには重要な活動になってくるのである。

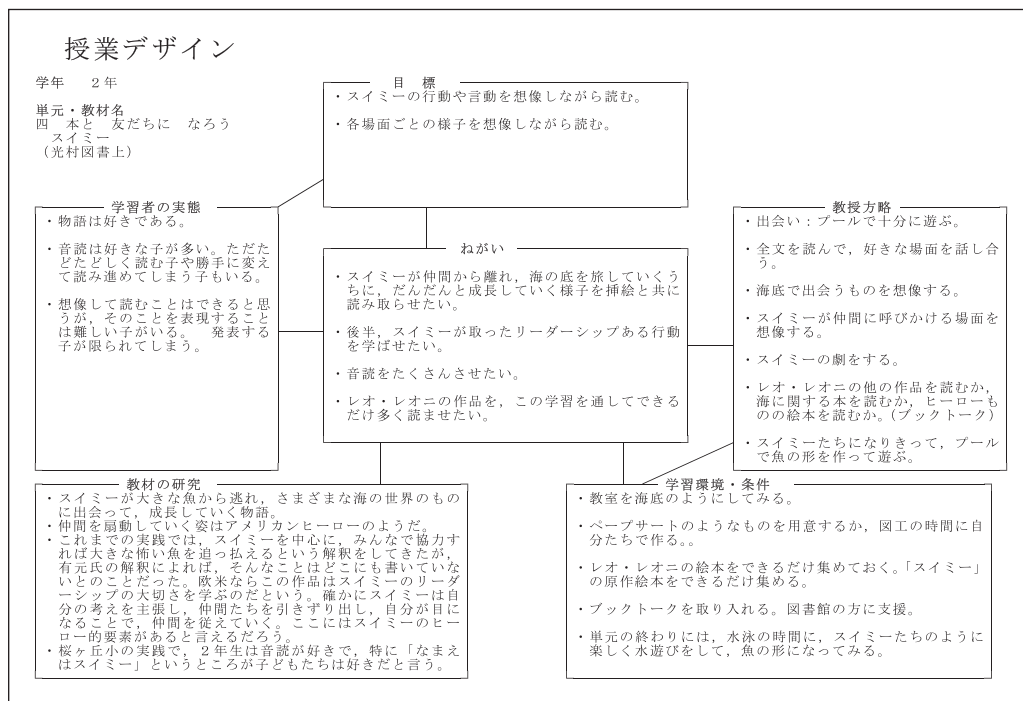
3. 授業デザインによる国語科授業（単元）構想の試み

それでは、実際に6つの構成要素を用いて、授業デザインによって授業を構想してみたいと思う。「四本と友だちになろう スイミー（2年光村図書上）」を試案として授業（単元）構想を授業デザインを表してみた。これまでの過去の実践経験と論をもとに筆者が考案したものである。ただ「学習者の実態」については、筆者の過去の2年生を担当した経験を生かして書いている。

以下が現在筆者考える授業デザインによるスイミーの授業（単元）構想である。

まず、筆者は「ねがい」は教材を読むことによって、その主題や教材のもつ魅力から考えた。つまりほぼ同時に「教材の研究」をしながら、「ねがい」が生まれ出されたと言っていいだろう。この教材の主題はスイミーの成長物語である。ここではスイミーが楽しい仲間と別れさせられ、旅によって知恵や勇気を身に付け、残った仲間たちを引き連れて大きな魚を追い出すというヒーロー物語でもある。特にスイミーのリーダーシップによって大きな魚に立ち向かい、元の楽しい生活を取り戻したわけである。そうすると、やはり、このスイミーのリーダーシップある行動は

17) 拙稿「文化的な営みを大切にしたい国語科の学習 5年の実践 単元『作家になって本を書こう』の実践を通して」『静岡・ことばの世界 第3号』静岡県方言研究会、2000、pp. 70-78.



是非読み取らせたいと思うし、ここから自分たちの日々の生活に生きる学びがあるのではないかと思う。そして、この作品をきっかけにレオ・レオニの他の作品を読ませていきたいと思う。この「ねがい」があり、一方で「目標」として学習指導要領でおさえるべき「読むこと」の目標があるが、場面を想像することは、スイミーの取った行動を読むことであり、「ねがい」につながる読みは必然的に「読むこと」の目標につながっていくだろうと思う。そして、目の前の「学習者の実態」であるが、これについては、現在小学校を離れたので、過去の自分の2年生の経験で書いているが、基本的に子どもたちは、この物語は好きである。比較的すんなりスイミーの世界に入ることができる。しかし、一方で読み取りに不安を抱える子もいるのは事実で、個に応じた指導が必要である。「教授方略」と「学習環境・条件」は大まかな教材の捉えが決まれば、実際にどんな授業展開にしていくかを考えることになる。構想の段階なので、授業者が思いつくアイデアを書いてみることである。

この授業デザインで完成ではない。ここからスタートであり、ここでは単元の構想であるが日々の授業によって、この構想が変貌していく。これは授業が生きているからである。授業が展開していくにつれ、子どもと教師と学習対象が相互にかかわりながら、その中から子どもの学び、教師の学びが生み出されてくるのである。それはまさに様々なドラマが展開されてくるっていいだろう。そのために、教師は即興性をもった「教育的かかわり」¹⁸⁾が必要になってくる。それによって授業デザインは、その都度変貌していくということになる。それこそが、授業が「生き

18) 鹿毛雅治「第3章教師が授業を研究することの意味」『教育実践臨床研究 自分の実現したい授業を創り出す』藤沢教育文化センター、2008、pp. 70-78.

て動いている」ことなのである。

以上、今回試案として構想してみたが、この授業デザインという考え方をもとに授業を構想することのモデルとして提案したい。

む す び

授業デザインという考え方を藤岡氏の論を中心に授業そのものの在り方について、多少なりと整理することができた。ただ藤岡氏の授業論は、まだ奥が深く、もう少し内奥に迫るようにしていきたいと思う。授業が単に目標達成のための授業ではないということ、日々の授業は子どもと教師が人と人との関係の中で、まさに互いに「生きている」ということを原則として捉えていかなければならないこと。そのために授業をどう構想していくか、目の前の子どもの今と向き合い、教師の力量を発揮して授業を構築していくことが重要であるということが明らかになった。

そして、国語科の授業に目を向けた時、国語科が単に言語能力の育成に終わるのではなく、子どもが言語文化を享受し、そこから創造のための学びを経験していくことが国語科の授業の本質に迫ることであるということが明確になった。そのために、教師は何ができるのか。これも教師が言語文化の遺産を伝承するという使命と、子どもと共に言語文化創造の学びに関わることの大切さが浮かび上がってきた。そして、教師の力量形成に大きく寄与するものであることも同時に明確になったといえる。

今後は授業デザインをした後の実践の蓄積が必要である。授業デザインは授業展開によって、どう変貌していくのか、また、その中で、子どもや教師はどんな学びをしていくのか、このことについて研究を進めていくつもりである。今回は授業サイクルの中でも、授業前の段階である授業構想に着目したが、授業はそれだけに終わるわけではない。授業の展開中に授業アセスメントや授業リフレクション¹⁹⁾を行いながら、自らの実践を自省しながら日々授業が進んでいくわけであり、授業後においても自分と向き合い省察していかなければならないのである。

[2009. 9. 28 受理]

19) 授業アセスメント、授業リフレクションについては、静岡大学教育学部附属浜松小学校紀要（1996）において、集団的授業評価のひとつとして授業アセスメントを取り上げて授業研究を行ってきた。この授業アセスメントの中で自分の授業を振り返ることを授業リフレクションと呼び、その結果報告を受けて、複数の教師で話し合い、FF情報を得ることをねらいとしているものである。藤岡氏もこの授業研究に深く関わった経緯がある。